

歌手・俳優の武田鉄矢は小松を「絵画の師」と仰いでおり、ライブペインティング時には櫻山神社を訪れている。



計画は一時ストップしてしまふ。復興工事に伴う工事費の高騰や人材・資材不足など、様々な困難を乗り越えて2015（平成27）年7月には解体工事に着工。二代目の複雑な構造体の解体など数々の難問を解決し、3年10ヶ月後には三代目となる「新岩手教育会館」が無事竣工した。東日本大震災、2016（平成28）年8月の台風10号豪雨と度重なる天

災で大きな被害を受けた岩手県。そのため、新しく完成した三代目の岩手教育会館には今後50年、100年と県民、市民を守り続ける建築でありたいという想いが込められている。そして、この趣旨に共感した小松美羽はこの建物に長期滞在し、自身最大となる大壁画を描き、エントランスホールに設置することになった。建物完成の1年ほど前、盛岡城跡公園にある櫻山神社でライブペインティングを実施し、『水龍環抱』を描いた小松こそ壁画を描くのにふさわしいと、選ばれたのだらう。

壁画のモチーフとなったのは、岩手県内や盛岡市に伝わる民話や神話、風土や地形など。その土地に存在する人智を超えた力に、人々を守ってほしいという想いを、この神獣讃歌『巖鷲幸呼来豊穰さんさ』に託しているのだ。作品が完成した際、その傍らに、彼女は次のような言葉を掲げた。

「今も昔もこれからも岩手の土地には、一対の大きな水龍が住んでおります。水龍は川の化身であり、その形は年を追うごとに変化を重ねておりました。このエネルギーはとても大きなもので、呼応するように皆さんの神獣たちも川の地形に寄り添うように集まり、人々の魂を守るようになりました。（中略）どうかこれからも、人々の魂を見つめ続けて、お守り続けてください。」

今年4月に竣工した新しい岩手教育会館は、1936（昭和11）年に完成した初代から数えて3代目に当たる。



エントランスホールの巨大な壁画、神獣讃歌『巖鷲幸呼来豊穰さんさ』。

新岩手教育会館—盛岡の新しいパワースポット誕生。

人々を災害から守り続ける建築と神獣たち。

南

部藩20万石の城下町として整備され、その後も繁栄を続けた盛岡市。1965（昭和40）年にはその中心部にある盛岡城跡公園に隣接して最先端の建物が完成した。「岩手教育会館」だ。1936（昭和11）年に建てられた初代に続く、二代目の岩手教育会館を手掛けたのは、日本を代表する建築家・菊竹清訓。この名建築は、岩手県の教育の振興拠点として用いられ、さらに760名収容の大ホールでは各種集会やコンサートなどが催された。

二代目・岩手教育会館の完成から約50年。さすがの名建築も老朽化が進んだことから、解体建替えが決まった。しかし、その決定から間もない2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災によって、工事



2017年、盛岡城跡公園にある櫻山神社で、小松美羽はライブペインティングをおこなった。



昨年のライブペインティングで完成した「水龍環抱」は、新岩手教育会館の2階ホワイエに常設展示されている。